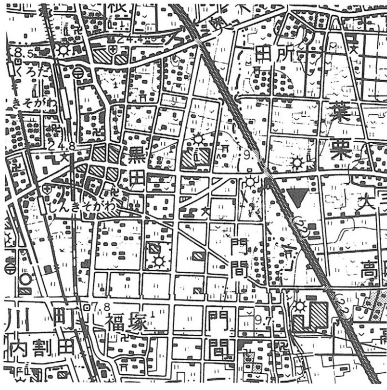


愛知・大毛沖遺跡
おおけおき

- 1 所在地 愛知県一宮市大字大毛
- 2 調査期間 一 一九九三年(平5)七月～二月
二 一九九四年二月～一九九五年一月
- 3 発掘機関 (財)愛知県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 一 永井宏幸・小池一徳・栗林典昭
二 永井宏幸・小池一徳・牧 謙治
- 5 遺跡の種類 一 集落跡、二 河川跡
- 6 遺跡の年代 古代～中世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(岐阜・名古屋北部)

大毛沖遺跡は、一宮市域の北東部、木曾川左岸に形成された自然堤防及びその後背湿地に立地する。東海北陸自動車道建設の事前調査として、一九九三年から一九九五年にかけて調査を実施した。

九三A区SX〇一は、居

住域Iとされる中世集落の一端に位置する。SX〇一は二三世紀前半の大型の廃棄土坑で、卒塔婆が一点、その他に梅檀の種子、山茶碗、伊勢型鍋、白磁、青磁が出土している。また、体部外面に判読不能の墨書がみられる山茶碗一点、「まつ」と底部外面に書かれた小皿一点が出土している。

九四G区SX〇二は、遺跡の中央を北東から南西にかけて縦断する、古代から中世の河川に合流する溝である。SX〇二は上位層に拳大の河原石を敷き詰めてあり、ここから九世紀後半頃の呪符木簡が一点と灰釉陶器片が出土した。

8 木簡の釈文・内容

一 九三A区

(1) 「南无大□

(108)×35×3 061

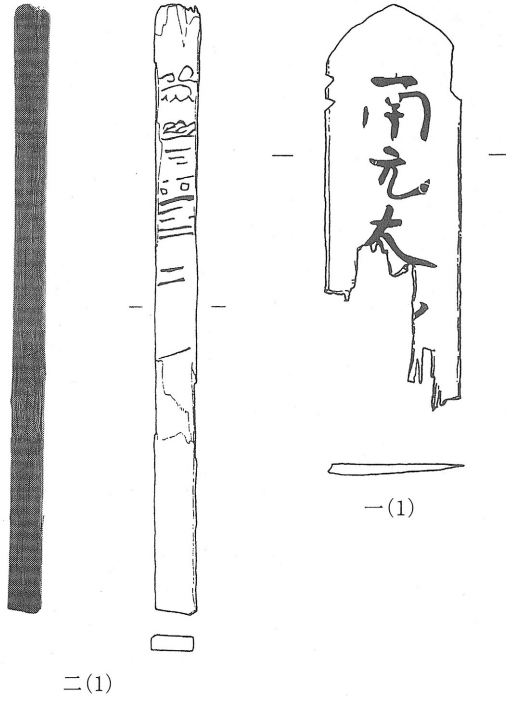
上部の形状は圭頭で、その下に切り込みが二条入る。下部を欠損しているため、墨書の全容は明らかではないが、形状と表記内容から卒塔婆とみられる。

二 九四G区

(1) 「(符録)」

320×20×7 011

上部が一部欠損しているものの、ほぼ完形品。記載内容は不明で



あるが、符録の記載から呪符木簡の断片と考えられる。

9 関係文献

(財)愛知県埋蔵文化財センター『大毛沖遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書六六、一九九六年)

(永井宏幸)